死線を越えて

静岡県　太田　すみ江

はじめに

今日は終戦記念日である。終戦のときのことは、今まで心に掛けながら忙しさと生来の筆無精とが重なって、ついつい億劫になり書きそびれていたが、記憶の糸をたどって、心に強く感じていることだけでもと書いてみた。

朝鮮に行ってまだ日も浅く、地名も方角も分からないままに、三年の月日が過ぎてしまった。そんな中で、想像もしなかった敗戦という事件に巻き込まれてしまった。避難が始まった直後は死の恐怖に襲われ、また終戦直後の朝鮮では筆記具を持つことすら許されなかったから、メモも日記もなく、薄れていく記憶を一つ一つ思い出しながら綴った。

一　突如ソ連の参戦

昭和二十（一九四五）年に入って、戦争が急に我々の身近に迫ってきた。主人は、六月二十八日に羅南の部隊に召集され、うわさでは「済州島方面に行ったのではないか」ということであった。私は一人羅津に残され、主人が帰るのを待つことになった。

昭和二十年八月九日の夜明け前、突如ソ連軍の飛行機の攻撃を受けた。窓から外を見ると、空には照明弾が輝き真昼のように明るく、三キロメートル離れた埠頭までもはっきり見えた。すぐにただ事ではないと思って転げ込むようにして防空壕に入ったものの、爆弾、機銃掃射がものすごく、一日中外には出られなかった。

夕方になって、やっと空襲が一段落したので家に入ってみると、窓ガラスはすべて破れ、壁は落ち足の踏み場もなかった。入港していた貨物船の船員たちが避難してきて、防空壕はたちまちいっぱいになった。船員たちは「今のはアメリカの艦載機ではないか？」と言っていた。空襲が途絶えたとき外に出てみると、その瞬間、高射砲弾が命中した飛行機が木の葉のように落ちるのが見えたが、その後高射砲は沈黙してしまって、空は敵機の自由気ままになってしまった。

二　避難　楡津洞へ

朝になると、夕べの船員さんたちは思い思いの方向へ歩き始め、後には私たちだけが残された。羅津警察署員が来て「羅津に総避難命令が出たので、家族は全員第二線まで退避、職員は残って警備に当たるように」と指示があった。第二線として指示された場所は、ここから三十キロメートル後方の楡津洞（ユシンドウ）であった。警察が手配したトラックの第一便が到着し、避難家族の半分がトラックに乗って避難し、残りの人たちはそのトラックが引き返してくるのを待つことになった。近所の人たちは続々と山に向かって避難を始めた。しかし私たちが乗る予定のトラックは待てど暮らせど来ない。午後三時になっても、とうとう引き返してこなかった。そのうちに、「埠頭が爆撃されて道が通れなくなった」という情報が入り、大変なことになったと思った。残った家族は、徒歩で山を越えて先発隊が行った学校まで行くことになり、年配の警察官二人が引率することになった。

家を出るとき、飯盒いっぱいに詰め込んだご飯と、入るだけの必需品を入れたリュックサックを背負い、小さな子供の手を引きながら、皆必死で歩いた。同じ道を行く人の中には、埠頭の空襲でやられたのか、担架に乗せられた人、足をけがして杖にすがって歩いている人、白衣の傷病兵などが大勢いて、一歩でも半歩でも早くと、敵機の目標になりにくい山の方へ向かって急いだ。

しかし、山に到達する前にソ連機がやってきて、低空で機銃掃射を始めた。みんな土手に腹ばいになって息を潜めていたが、何機もの飛行機が波状的にやってきた。機関銃のバリバリという音が耳をつんざき、そのたびに「もうこの世の終わりか」と思った。敵機が去るのを待って、山に向かって転がるように夢中で走った。

やっとの思いで山の中に着いたときには、辺りは夕闇が迫り、雨模様の天候と重なって薄暗くなっていた。幼い子供たちを抱えた女の集団が空襲の間を縫いながら、一日かかってやっとここまでたどり着いたのである。体は綿のように疲れ切っていた。皆座ったまま動こうとしないし、声も出ない様子を見た引率者の職員は、「荷物は全部捨てて身軽になるように」と指示した。明日の命の保証もなく、今夜のことすら考えないままに、荷物を最小限に減らすため、出掛ける前に炊いたばかりのご飯が入った飯盒までも捨ててしまった。

夜になったが、疲れ切った体はもう動かずに、ここで寝てしまいたいと思ったが、一刻も早く先発隊と合流しなければならないから、ゆっくりすることは許されない。周りはさらに暗くなり、戦時中の黒ずくめの服装では、足の遅い人は前を歩く人を見失ってしまうほどだった。職員が縄をつなぎ合わせて「みんなしっかり縄をつかんで歩きなさい」と注意した。どこだったかはっきりしないが、ようやく山一つ越えて平らな所に出た。羅津の方を振り返ると、激しい空襲で空は真っ赤に焼けているのが見え、怖くなって震え上がった。

地元の朝鮮人に、「ここは明湖洞だから、この道を下の方に行けば民家がある」と言われ、みんな元気づいた。引率者の話では、その部落からトラックで先発隊と合流する予定だという。やっとの思いでその部落に着いたころには、ようやく夜が明けようとしていた。部落に着いてみると、どの家も空っぽで猫の子一匹いない。たまたま一人残っていた朝鮮人のお爺さんに、「ここはもうすぐソ連軍の艦砲射撃があるそうだから、弾の届かない所まで引き返すがよい」と言われた。

それからまた二時間あまりも歩いたころ、一軒の朝鮮人農家があったが、ここも住んでいる人はいなかった。悪いとは思ったが、その家に残っていたお米、みそ、醤油で二、三十人分のお握りを作った。それまでの恐怖の連続と疲労で、お腹がすいたとも思ってはいなかったが、実は全く腹へこであった。

二日目に、ようやく先発隊が待つ楡津洞に到着した。しかし状況が一段と悪化したとのことで、休む間もなく出発しなければならなかった。（朝鮮人の家が空き家になっていたのは、日本人が避難した後の家に入ったためと思われる）

三　見捨てられた女の子

それから昼は歩き、夜は朝鮮人の空き家に泊まって寝るという生活が、何日にわたったか記憶にないほど続いた。会寧の駅からだったか、やっとの思いで無蓋貨車に乗ることができた。地獄で仏に会った思いであった。そのときは警備の警察職員も一緒だったと思うが、どの貨車も避難民で超満員であった。この列車にどのくらいの時間乗ったか記憶にないが、汽車がトンネルを出た途端、すごい空襲を受けた。避難民は貨車から飛び降りて、土手の草むらに伏せたまま動けなかった。この機銃掃射で列車が動かなくなったので、仕方なく山道を南下することになった。細い山道は、列車から降りて歩き出した人たちでいっぱいになった。後の方から日本の兵隊がたくさん歩いてきたが、いずれも身軽な服装で避難民を追い越して、足早に通り過ぎて行った。兵隊さんには兵隊さんの任務があるのだろうが、置き去られた私たちはとても心細かった。

それからの毎日は、夜明けから陽が落ちるまでひたすら歩き続けた。赤ちゃんのいる人は赤ちゃんを背負い、腰にはいつも二、三枚のおむつをぶら下げて歩きながら乾かす有様であった。官舎で隣に住んでいた奥さんは産後間もなくだったので、ときどき私が赤ちゃんを負ぶってあげた。

普段見かけない炭坑の町だったからよく覚えているが、古茂山という所で沖縄出身の五人家族と一緒になった。小学校二年生になる足の不自由な女の子を連れていた。気の毒に思った若い警察職員が、交代で女の子を背負って、みんなと一緒に歩いていた。団体の中で足の速いグループの人は、遅れがちな人たちと少し距離が開くと、必ず立ち

止まって間を詰めるほど気を遣っていたのに、子供を背負ってもらっていた親たちが、いつの間にか姿をくらましてしまった。ときがときだけに、親が見捨てた子供をどうすることもできなかった。心を鬼にして子供を置き去りにするしかなかった。後から来た人に聞くと、泣き叫ぶ子供を見た朝鮮人が、「子供を連れて行かなければここを通さない」と言っていたと聞いたが、日本に帰ってからも、残された子供と残してきた親たちも、どんなにか悲しい思いをしているだろうと心が痛んだ。

四　さらに山奥へ

古茂山から白岩（ハクガン）までは、警察が交渉して軽便鉄道に乗せてもらった。その間の記憶に残っているのは、食事は家族単位で作っていたことと、八月十五日の終戦の日まではお米は途中の農家から買い、野菜などは通りすがりの畑のニンジンや馬鈴薯を掘って食べていたことである。羅津の家にいる間は、物のない生活の中で非常用にお米を少しずつ蓄えていた。空襲で家が焼けても、一斗缶にいっぱい貯めた大切なお米は焼け残るようにと、庭の畑の茂みに置いてきたことを思い出した。避難の第一夜に身の回りの物は全部捨ててしまったので、何も持っていなかったが、時計だけは主人の物と私の物と二つ持っていた。まず主人の時計を金に換えた。後になってもう一つの私の時計も短針がはずれかかっていて気が引けたが、背に腹は代えられないと、これもまたお米に代えた。朝鮮人の農家に行ったとき、対応に出たオモニー（お母さん）が黙ってお米と代えてくれた。

毎日毎日、真夏のかんかん照りの中を歩いたため汗が出てのどが渇くので、どのくらい川の水や田圃の水を飲んだか分からない。夕方、陽が陰ると川で行水をして汗を流した。

田舎の学校を宿にしたときは、乾草がいっぱい積んであった。これを布団代わりにして寝たときの気持ちよさは、終生忘れない。

全く違う話ではあるが、死んだ友だちの子供を、出発前のわずかな時間に線路脇の山の中に葬ったこともあった。あるとき、無蓋車の中で死んだ子供を抱いている奥さんがいた。奥さんはどうすることもできないから、汽車が途中で止まったわずかな間に四、五人の男が線路脇の畑に埋め、動き始めた貨車に飛び乗るといったことも忘れられないことの一つである。

汽車の避難で思い出すのが、貨車なら上等であったということだ。無蓋車にでも乗れたら天国である。有蓋車の車内に入れないときには、屋根にもよじ登った。このときは腹ばいになって屋根の縁に掴まっていたが、トンネルにでも入ろうものなら顔や手は真っ黒になった。機関車のすぐ後ろの貨車の屋根に乗ったときなど、飛んでくる火の粉で死ぬ思いだった。

五　終戦の日

終戦を聞いたのは咸鏡南道の田舎町に着いたときだったと思う。はじめはだれもが「デマ」だとして本気にしなかった。「広島には、一生かかっても草木が生えないような強力な爆弾が落とされた」とか、「日本軍が反撃してウラジオストックを占領した」とか、いろんなうわさが流れ、みんな聞くたびに一喜一憂した。しかし日本の降伏が本当だったことが分かり、急に体中の力が抜けた思いだった。今日の命の保証すらなくなったのである。平和なときには考えられないような、不安な気持ちに襲われた。

この日を境にして、朝鮮人の日本人に対する態度が一変した。今までは日本人避難民に対して半ば同情的だったのが、手の平を返すように冷ややかな態度になった。「今日から、ここは日本ではないのだから、畑の作物はじめ一切の物に手を触れてはいけない」と上司から言われた。

この後南下を続け、咸鏡南道の白岩に着いたときだったと思うが、武装解除の命令があった。日本刀を持っていた人たちは、「最初で最後の試し切りだ」といって立木に向かって一振りする人もいた。私たちも見ていたが、感心するほど日本刀はよく切れた。その晩は、職員の人たちがどこで

手に入れたのか、豚汁の食べ放題のご馳走にあずかった。今までまともに食べていなかったのに、急に栄養の豊富なものを腹いっぱい食べてお腹の方がびっくりしたのか、次の日から血便に悩まされ閉口した。ここでわずかずつであったが家族単位に現金の支給があった。このお金が、この後の難民生活にどれほど助かったか知れない。

白岩の駅をスタートしてから山や田舎道ばかり歩いていたが、今度は線路の上を歩くことにした。線路の方がまっすぐで早道であった。以後、日中は枕木の上を歩き続け、日が暮れると川辺で野宿するという生活を繰り返した。川原の石は太陽で焼けていて最初は温かいが、一眠りして目覚める夜中には冷えてしまって寝つけなくなってしまう。仕方なく火を焚いて夜明けを待つという毎日であった。

線路を歩いていて怖いのは、鉄橋を渡るときである。「もしも、渡っているときに列車がきたらどうしよう」と心配であったが、幸いにも列車はほとんど通らなかった。食事は毎日野草を混ぜたおじやくらいしかできなかった。ニンジンを買って生で食べたことがあったが、「こんなに甘くて美味しいものだったのか」と、そのときの味わいを今でも思い出す。避難民は筆記具と刃物を持つことを一切禁止されていたので、野菜などを切るためにトタン板の切れ端を拾って包丁代わりにした。

ある日、海の見える松林の中にバラックの住宅があったので、一夜の宿にと勝手に泊まり込むことにして、入れるだけ入って寝ることになったが、一眠りするかしないうちに、みんな体中がかゆくて寝るどころではなくなった。ダニか南京虫に違いない。皆起き出して大騒ぎになった。まんじりともしないで迎えた朝、ここから平壌に行く人たちと別れた。

六　恐怖の日、警察官狩り

終戦になって、日本人の警察官に代わる朝鮮人保安隊というのができた。この保安隊が旧日本の兵隊、軍属、警察官らを血眼になって捕らえ始めた。困ったことに偽保安隊員が出現するようになって、物取り専門の泥棒と同様で大変悩まされた。

捜査の対象になっていた警察官だった人は、羅津を離れるとき既に私服を着用していたように思うが、保安隊に細かく調べられると困るので、警察で支給されていた衣類や靴、靴下などは全部捨て、羅津警察署の文字の入った公式文書などは記号番号など必要な事項を別に書き残し、全部焼却処分した。数多い日本人避難民の中には、朝鮮服を着ている人も見かけた。

明川（メイセン）に近付いたとき「ここら辺は思想が悪いから」と言う人がいて、広い道を避けて山道を通ったが、先回りした保安隊員が畑の中で待ち伏せていた。運悪く避難民をよく見知っている保安隊員がいて、警察官だった人を引っ張り出し、奥さんや子供の前で殴る蹴るの暴行を加えた。耐えかねたその人の奥さんが「主人の代わりに私を殴ってください」と叫んでいたが、それは悲惨な光景であった。私は主人が召集されていて、この避難民の中にいなかったのは幸いであった。結局この騒ぎで連行されたのは四、五人だったように思う。捕まった人の中には、警察記章の入った革バンドのバックルがきっかけになった人がいた。随分慎重に警察関係のものは処分したつもりだったのに、ちょっとした不注意が大変なことになると震え上がった。

七　団体を解散

ここから山道を降りて平地の道を行くことになった。その道は、私たちの前にも後ろにも避難民の列が延々と続いていた。城津（ジョウシン）間近の部落に入ったころ、保安隊に停止を命じられ、近くの大きな民家に入れられた。保安隊の詰め所のような所だったと思うが、別に危害を加えられることがなかったのでよかった。私たちの団体を引率していた主任が、「私が責任を取ってここに残るから、ほかの者は開放してもらいたい」と願い出てくれて、私たちは解放された。そして「これ以上団体行動を取ることは危険だから、これから先は個人行動

を取るように」と指示され、今まで苦労を共にした団体は解散となり、残ることになった主任に感謝しつつ、再び南下し始めた。私は主人の海軍工廠時代からの友人で茨城県出身の沼田さん夫妻と行動を共にすることに決めた。残った主任は後に釈放され、帰国されたと聞いている。

八　ソ連兵の女狩り

城津に入った日の夕方、駅に行くと避難民で黒山の人だかりができていた。聞けば、汽車を待つ人たちだという。早速汽車に乗ろうとすると「小学校で順番を待つように」と言われ、小学校で一晩を明かしたが、私たちに順番が回ってきたのは一週間後であった。その一週間の学校での生活の怖かったことは、言葉では言い尽くせない。怖かったのはソ連兵である。彼らは避難民を襲っては所持品、特に万年筆と時計を欲しがった。品物で済んでいるうちはよかったが、夜となく昼となく女性を連れて行っては暴行を加え始めた。女の人の悲鳴が聞こえない日はなかった。気休めに過ぎなかったが、私たちは顔いっぱいに鍋墨を塗り、頭は丸坊主にしたうえ、汚い手拭いで頬かぶりをした。また、ソ連兵は子連れには手を出さないと聞いたので、よその子を借りてきて添い寝をしたりした。それでも教室の中にソ連兵の足音が聞こえるたびに、息を凝らして小さくなっていた。手洗いに行くときは、時間を決めて男性二、三人に付き添ってもらって行くようにした。ソ連兵の撃つ実弾の音が昼となく夜となく聞こえて、不気味で怖かった。

九　咸興へ

一週間ほどして、ようやく汽車に乗る許可が出た。駅に着くと相変わらず黒山の人が列車を待っていて、私たちがいつ乗れるのか分からない状態であった。随分待たされてやっとのことで乗れたが、無蓋車に身動きもできないほどに詰め込まれた。咸興も無事通過することができた。それから何時間か走って元山に着いてから、汽車は止まったまま動かなくなった。駅の構内を見ると、前の

列車で来た人たちでいっぱいになっていた。汽車の乗務員から「一歩も外へ出てはいけない」と缶詰にされた。そして言われたことは「元の居住地に帰るように」であった。汽車は私たちを乗せて元来た道を逆走し、咸興の駅で停車した。降りようとすると、保安隊が来て日本刀を振りかざして「ここで降りてはいけない」と叫び、降りようとする人たちを止め、汽車は再び発車した。

同じグループの人たちが「このまま前の居住地に戻れば、すぐ捕まってしまう。とんでもないことだ」と咸興駅に汽車が止まったとき、申し合わせた十人くらいが夜陰に乗じて汽車から飛び降りた。ここの駅は小さな駅で、保安隊や駅員の姿も見えなかったので、駅のそばの空き家になっていた窒素会社の社宅に飛び込んで隠れ、ここで一夜を明かした。避難生活へ逆戻りの始まりだった。

十　保安隊に助けられる

羅津の家を出たころは真夏の八月であったが、避難中に秋の気配が濃くなって空も高く、焼けるような暑さはなく、歩くのにも気持ちが良かった。

ある日の夕方、今夜も野宿かと思っていたが「避難民が、一人も通らない田舎で野宿をするのもどうか？」と考え込んでいたら、駐在所跡を使っていた保安隊支部の建物が目に入った。恐る恐る事情を話し、一夜の宿を頼んだら「今までそういうことはなかったが」と言いながらも、庭続きの元職員住宅を提供してくれた。久しぶりの畳の感触は何ともいえない快い感じだった。その夜はちょうど元の朝鮮部落のお盆だそうで、保安隊長の所には住民からのご馳走が届けられていた。そのご馳走が避難民の私たちにまで回され、久しぶりにお腹いっぱいご馳走をいただいて、生き返った気持ちだった。翌朝、そのお礼として庭の草取りをすることにした。二時間ぐらいで庭はきれいになったので、泊めてもらったお礼のあいさつに行くと、隊長が「今から南下しても無理だろう。この辺の農家では稲刈りで忙しくなるから手伝いをしたらどうか」と親切に言ってくれた。みんなも隊

長の言葉に従って、夫婦連れの人はそれぞれ割り当てられた農家に行き、ご主人が避難途中で保安隊に捕らえられた子供連れの奥さんと私の二人は、保安隊のご飯炊きをすることになった。

久しぶりに落ち着いた生活をすることになった。長らく入らなかったお風呂もいただき、ご飯も十分に食べて、よみがえった気持ちだった。疲れ切った体も目に見えて回復し、本当に有り難かった。

私たち二人は、男の隊員ばかりの中での勤務であったが、二人で気を合わせて勤め上げた。奥さんが子供連れであったことも、また相手が指導者の立場にある人たちであったことも幸いした。しかし避難民の身では良いことばかりではなかった。十日ばかり経ったころに、相棒の奥さんが高熱を出して寝込んでしまった。朝鮮人は病人を嫌うと聞いていたので、保安隊には内緒で奥さんを離れに移して休ませた。寝込んだ奥さんには三度三度お握りを届け、保安隊の世話は私一人で続けた。奥さんはしばらくしてようやく元気になり、咸興に行ってしまった。

十一　咸興医専寮

十一月半ばごろだったろうか、今度は自分が相棒の奥さんと同じように、高熱が出る病気にかかって寝込んでしまった。高い熱のため、はっきりした記憶はないが、確か同じ避難民で部落に住み込んでいた人が、寝込んだ私をリヤカーに乗せて、一日がかりで咸興の避難民収容所まで送り込んでくれた。そのとき保安隊の隊長が、私が当座困らないようにといって三升ほどの米と、日本人が残していった和服二、三枚を持たせてくれたように記憶している。

リヤカーに揺られながら、ようやく収容所に着いた。疲れと高熱のため、持ってきた荷物を枕元に置いたまますぐに眠ってしまった。翌朝目が覚めて枕元を見ると、置いたはずの荷物が何もない。びっくりしても、もう遅い。寝ている間に全部盗られてしまったのだ。世の中が「盗られる方が悪い」という風に変わっていた。「困った」と思いな

がら、またすぐ眠ってしまった。

収容所には、同じような病気の人が何人もいたが、医者は一人もいないし薬ひとつないので、体力のない人は皆死んでしまった。この病気は朝鮮の風土病で、「再帰熱」と言われ、一度かかると何とか治ったと思っても再発することが多く、二度目にはもう体力的にも持たず死亡する人が多いようであった。私はお陰で徐々にではあったが回復できた。

外はもう大分寒くなっていた。病気のため、長く休んだので外へ出てみたかった。食糧も何とかしなければとは思うものの、体力が衰えているのか歩いていてもすぐ転んでしまい、どうにもならなかった。

この収容所にいたのは短い間で、間もなく医専療に移ることになった。医専寮には大勢の病人が収容されていた。羅津の警察から一緒に避難してきた、茨城県出身の夫婦や保安隊で一緒にいた奥さんなどもいて、顔見知りがそろっていて心強かった。

この寮では、はじめは城津と同様、夜になると毎日のようにソ連兵が土足で上がってきて「女を出せ」と叫ぶので、皆で部屋を真っ暗にして中から芯張り棒をかけ、外から開けられないように押さえていた。時期は覚えていないが、こんな状態はソ連軍憲兵隊が常駐するようになってやっと解消し、以後安心して生活ができるようになった。しかし、そのころから寮内の住人に死者が続出するようになり、朝目が覚めると同室の「あの人も」「この人も」という有様であった。悲惨なのは、死んでいる人はほとんど裸であった。生き残った人が寒さに耐えかねて、死んだ人の着物をはぎ取ってしまうのである。そのころの食べ物は、重湯のようなお粥だけで量も少なく、人の心は地獄の餓鬼のようになっていた。

十二　お産

同室の奥さんのお産が始まったが、幸い助産婦の経験者がいて取り上げてくれた。すぐ赤ちゃん

を逆さにして背中をたたくと、赤ちゃんはか細い産声を上げたが、間もなく息を引き取ってしまった。産婦は大声でわけの分からないことを叫んでいたが、赤ちゃんを取り上げた人が私に「馬乗りになって動かさないように」と言うのでそうしていた。医者も産婆も身内の人も、だれ一人いない中でその奥さんは惨めに亡くなっていった。身内の人が知ったらどんな思いをするだろうと思うと、たまらない気持ちであった。

死体の始末は日本人世話会の人がした。毎日菰と荒縄を持って来ては、死体をくるんでいったん寮の玄関に積み上げ、大八車に乗せて共同墓地に運んで行った。同室のおばあさんが亡くなったとき、孫の娘さんが遺体にすがりながら、悲嘆にくれて泣き崩れるのをかまわず大八車に乗せて運び出したときは、地獄そのままのように思われた。同じときに羅津を出た家族についても「あの人が」「この人が」「だれそれの家族は全員」亡くなったという暗い話ばかりが伝わってきた。どの家族も、まず幼児、老人、次に父親、最後に母親が亡くなるというケースが多かった。「女は弱し、されど母は強し」の感を強くした。医専寮での生活では、最初はソ連兵に悩まされ、次は虱（シラミ）に苦しめられ、次は病人死者に悲しい思いをさせられる毎日であった。

十三　幸福寺での生活

昭和二十一年のお正月はここで迎えた。「餅はなくても正月は来るわ」と思いながらも、餅を一切れか二切れを買って来て食べた記憶がある。年が明けると、「医専寮は病人専用の収容所にするから、元気な者はここを出て幸福寺に引っ越してもらいたい」と言われ、私たちはお寺に引っ越した。茨城県の沼田さん夫婦も一緒に引っ越したが、保安隊にいた奥さんはそのままそこに残った。

お寺の本堂に入った避難民は多かったが、冬の北朝鮮は寒さが厳しかった。畳敷きだったからまだ良かったが、敷き布団などなかったので防空ずきんを長くしてその上に寝た。余分な着物は持っていなかったので、寒くてなかなか寝付けなかった。

男性は朝早く日本人世話会に行けば、使役など何らかの仕事を与えてくれた。女性は朝早く市場に行って餅やたばこを仕入れ、街頭で立ち売りをしてわずかな収入を得ていた。世話会が、わずかながらお米の配給をしてくれたのは嬉しかった。働けない人たちにも、朝夕一個ずつのお握りが配給された。お寺の本堂の広い廊下で分配するのだが、大の大人が配給場の周りに円形に座り、配るときにこぼれるお握りの米粒を、まるでカルタ取りの選手のように間髪を入れず争って拾う有様を見て、人間の食欲に対する本能のすさまじさと敗戦の惨めさを、恐ろしいほどの思いで見つめた。

ある日、医専寮の近くへお米の配給をもらいに行ったとき、かつて同室だった五年生くらいの男の子に出会った。その子が「おばさんと一緒にいたもう一人のおばさんが夕べ死んだよ！」と教えてくれた。驚いて駆け付けたら、亡くなって横たわっている女性と、一歳半くらいの子供がいた。この子は人見知りの激しい子だったのに、よほど寂しかったのであろう「おばちゃん」と言って飛びついてきたのには驚いた。抱こうとしてまた驚いた。一晩中冷たくなった母親に抱きついていたので、母親にくっついていた虱が全部子供に移って、子供の体は虱で真っ白になっていた。私は布で子供にたかっている虱を払い落とし、裸にしてリュックサックに入っていた親の着物と着せ替えた。亡くなった奥さんと同郷の沼田さんが、毛髪と爪を切って紙にくるみ、故郷の実家に届けると言って、子供を連れて寺に帰った。しばらくして沼田さんから、世話会の人が親を亡くした子供たちを預かる施設ができたからと、引き取って行ったと聞いた。このころには、避難民の子供たちはほとんど死んでしまい、走り回る元気な子供の姿は見られなくなっていた。

お寺の前庭にあった小さな小屋を、収容所や避難先で亡くなった人の遺体安置所にして、翌朝お

坊さんがお経を上げてから共同墓地に埋葬するようになった。それまでは、お経はおろか、線香一本も上げていなかった。当時は何もないときだったので当たり前のように思っていたが、こうなってからは何か救われたような気持ちになり、避難民全体が精神的に落ち着いてきたような気がした。

お寺から少し坂を登った所に咸興の元連隊の官舎がたくさんあって、ソ連兵の家族が住んでいた。お寺に近いので、だれが思いついたのか毎朝ゴミ箱あさりに行くようになった。早く行く人ほど良い残飯を拾って来た。ソ連兵の家族は馬鈴薯の皮を厚くむくので、皮について残った実が多く、十分食べられた。残飯をあさっているときソ連兵の奥さんに見付かり、石を投げつけられたときは何とも言えない惨めな気持ちだった。

あるとき、朝鮮人が明太（すけそう鱈）の頭だけを売りに来た。一つ十銭くらいだったと思ったが、一つだけ買って手近にあった材料と一緒に塩味だけで食べたが、本当に美味しかった。明太などまずいので、朝鮮人が干物として食べるだけであったが、あのときの美味しさは今でも忘れられない。

その後、女性は毎日というわけにはいかなかったが、ソ連軍の官舎で掃除や洗濯の手伝いをして、何がしかの食糧をもらってくるようになった。

友だちと二人で夕方の市場に行き、売れ残りの安いものを探していた。もう、日は落ちて暗くなりかけていた。一人の男が近づいてきて、「僕の家で手伝いが一人欲しい」と言うので友だちと相談したら、友だちは「私は帰るから、あなた行ってみたら」と言った。私は、前にもこのような要求があって二、三回大きな家の女中さんに行ったことがあったので、同じようなものだろうと一人合点して男について行った。

初めての道は遠く思うものだが、それにしても遠すぎると思った。何度も引き返そうと思ったが、もう少し、もう少しと付いて行ってしまった。いつの間にか町を通り過ぎて、田舎の長屋のような

所に着いた。「ここが僕の家だ」と言われ中をのぞくと、たった一間の家だった。大きな屋敷などとんでもない。「これは大変だ」と思い、男が中に入った隙に、今来た道を無我夢中で走って引き返した。後ろで呼ぶ声が聞こえたが、振り向きもせず一生懸命走り続けた。追いかけてくる様子もなくなったので落ち着いて周囲を眺めてみたら、辺りは一面の田圃で、その中に一本の線路が見え、ずっとその先に咸興駅と付近の町と思われる灯りが見えた。「あの灯りを目標にして行けばきっと帰れる」と思って、夢中で線路伝いに歩いた。

咸興駅に着くと、町はもう夜更けて寝静まり、人影はほとんど見られなかった。お寺に着き、本堂の大扉を開けて中に入ると、友だちが起きてきて「心配していた。帰ってきてくれて良かった」と言って慰めてくれた。その瞬間、たまった疲れと安どの気持ちで胸がつかえ、涙があふれてきた。

また、ある日の夕方、町の中をソ連兵に監視された三、四十人の日本兵が連れて行かれるのを見た。こんな光景をその後何度も見たが、敗戦の惨めさをひしひしと感じて情けなかった。

春も近付き、そろそろ外の空気も暖かく感じられるようになって、「山菜採り」とは、しゃれ込めないがタンポポ、ノビルなど食べられるものは手当たり次第採って食べた。ノビルはニラに似てとても美味しかった。このころから「内地には絶対帰れる」という自信がつき、その日を楽しみに頑張った。

四月に入ってからだったと思うが、避難民のだれからともなく「三十八度線近くまで汽車で輸送してくれる」という話が伝わってきた。友だち五、六人が集まって「輸送が始まる前に、一度日本人墓地に行ってみよう」ということになって、天気のいい日に朝から出掛けた。大きな刑務所の横を通ってしばらく歩き、山手に掛かる所に大きな穴がいくつも掘ってあった。深さは人の背丈くらい、幅は四メートルくらいあったと思う。遺体を埋めた所には、目印の赤い旗が立てられてあった。冬

の間は地面が凍って掘れないので、世話会の人が暖かいうちに掘ったと聞いた。そのほかにも、あちこちに小さな墓標が数知れず建っていた。みんな暖かいうちに家族が埋葬したお墓であろう。医専寮で亡くなった人たちのことを考えながら、両手を合わせお別れの祈りを捧げた。

十四　脱出

四月末ころ「日本への輸送が本決まりになるそうだ」というわさを聞いた。そして、現実に南に向かう人が身近にも出始めた。私たちも少ない荷物をまとめて咸興の駅に行き、駅に停まっていた無蓋車にぎっしりと詰め込まれ発車したが、元山を通り過ぎて鉄原辺りと思うころ、真っ暗闇の中で「汽車はこれ以上もう動かない」と停車してしまった。急いで飛び降りたみんなは、蜘蛛の子を散らすように四方に散って行った。長い間一緒だった茨城県の夫婦とも、ここではぐれてしまった。

気が付いたときは、知らないグループの人の後ろについて歩いていた。私がついていったグループは、咸興で商売をしていたかなり裕福な人たちで、お金を使って案内人を雇い、今夜中に三十八度線を越えようとしているようだった。ところが案内人は命が惜しいのであろう。グループの人のことを考えず、どんどん先に行ってしまう。お金を出した人たちもついては行けず「もうどうなってもいい、ここで野宿だ」と怒って道端に座り込んでしまった。一銭の金も出していない私たちが口を出せるわけはなく、一緒になって座り込んだ途端、睡魔に襲われ荷物を背負ったまま寝込んでしまった。揺さぶられ目が覚めてみると、勝手に行ってしまった先ほどの案内人であった。自分一人だけ歩いているのに気付いて、戻って来たのである。みんな元気を出して、今度は必死になって歩いた。

田圃から畑に登り、少し下ると大きな川が流れていた。案内人は「この川が三十八度線だから早く渡るように。真ん中から南側はいいが、北側に

行けばソ連兵に撃たれてしまうから！」と言い残して姿を消してしまった。夜はまだ明けきれず、薄暗かった。川の幅は二十メートルくらいあったように記憶している。渡り始めた人の中には、子供を肩車にしている男の人もいたが、川はかなり深く流れも速かった。私たちは女性ばかり四、五人のグループだった。川底の大きな石には苔が付いていてぬるぬると滑りやすく、一度転んだら水流に飲み込まれてそのまま流されてしまう心配があったので、お互いがしっかり手をつなぎ横一列になって、やっとの思いで対岸にたどり着いた。前の集団の人の姿は見えなかった。ともかくソ連兵に見付からぬよう、びしょ濡れのまま先を急いだ。ようやく山陰までたどり着いて枯れ木を拾って焚き火をし、ほっとした思いで暖まった。

十五　故国へ

五月とはいえ、北朝鮮の朝はまだ寒い。濡れたリュックサックを降ろし、体を暖める前にリュックサックの中から引揚証明書や大切なものを出して乾かした。衣類を乾かし切れないうちに雨がぽつぽつ降り出したので、濡れたままのものをまとめて急いで山を降りた。

山を降りた所に一件の農家があった。頼み込んで雨宿りと一泊をお願いした。朝になって思いもしない宿賃の請求があった。びっくりしたが、長居は無用と宿賃も払わずに退散して、先を目指した。

雨も上がり、北朝鮮と違ってのんびりした気分で二、三時間歩いて、ある部落に着いた。なんと、アメリカ兵が我々を見て手招きしている。逃げるわけにはいかないと思って近寄って行った。言葉が分からないから、言われるままにしていたら、頭のてっぺんから足のつま先までＤＤＴで消毒してくれた。北朝鮮と南朝鮮の違いにびっくりしてしまった。

ここからしばらく歩いて南朝鮮の一番北の駅にたどり着いた。久しぶりに腰掛けのある客車に乗せてもらい、ほっとした。京城に着くとすぐに日

本人世話会に案内された。そして世話会の人から「今すぐ引揚列車が釜山に向かって出発するから、大急ぎで行けば間に合う」と言われ、京城駅に走った。ようやく最後尾の車両に飛び乗ることができたが、客車ではなく貨物車であった。列車は順調に釜山港に着き、連絡船に乗ることができた。

それから何日かして、あこがれの日本、仙崎港に入港した。昭和二十一年五月十八日だったと記憶しているが、ようやく本土に上陸し、何回となく夢に見、心に描いた懐かしい故郷に帰ることができた。心配を掛けた親たちや、先に復員していた夫の顔を見ると、言葉は何も出ず涙があふれるばかりであった。

戦争に奪われた青春

京都府　徳田房子

一　父母のこと

私は、昭和七（一九三二）年に朝鮮咸鏡北道雄基という、小さな港町で生まれた。

父は、明治三十一（一八九八）年に岐阜県関市の近郷の農家に、姉弟三人の長男として生まれ、幼いころから百姓を嫌がり、小学四年生で学業を修了し、十歳で名古屋のある問屋に丁稚奉公に出た。一人前の商人になるための修行は非常に厳しく、誠につらいものであったそうだ。しかし頑張り抜いた父は、大正三（一九一四）年十六歳のとき、狭い内地で身を立てるか、それとも広い外地に飛び出して身を立てるか、とても悩んだそうだ。その結果、翌年、単身、船で朝鮮に渡ることを決意、故郷をあとにした。着いた港は清津。縁あって、酒屋を営む徳田商店に奉公、商人としての第